【参考資料３】 鹿児島学習定着度調査結果について（Ｐ６～12）

Ⅲ　児童生徒質問紙と学校質問紙の結果から

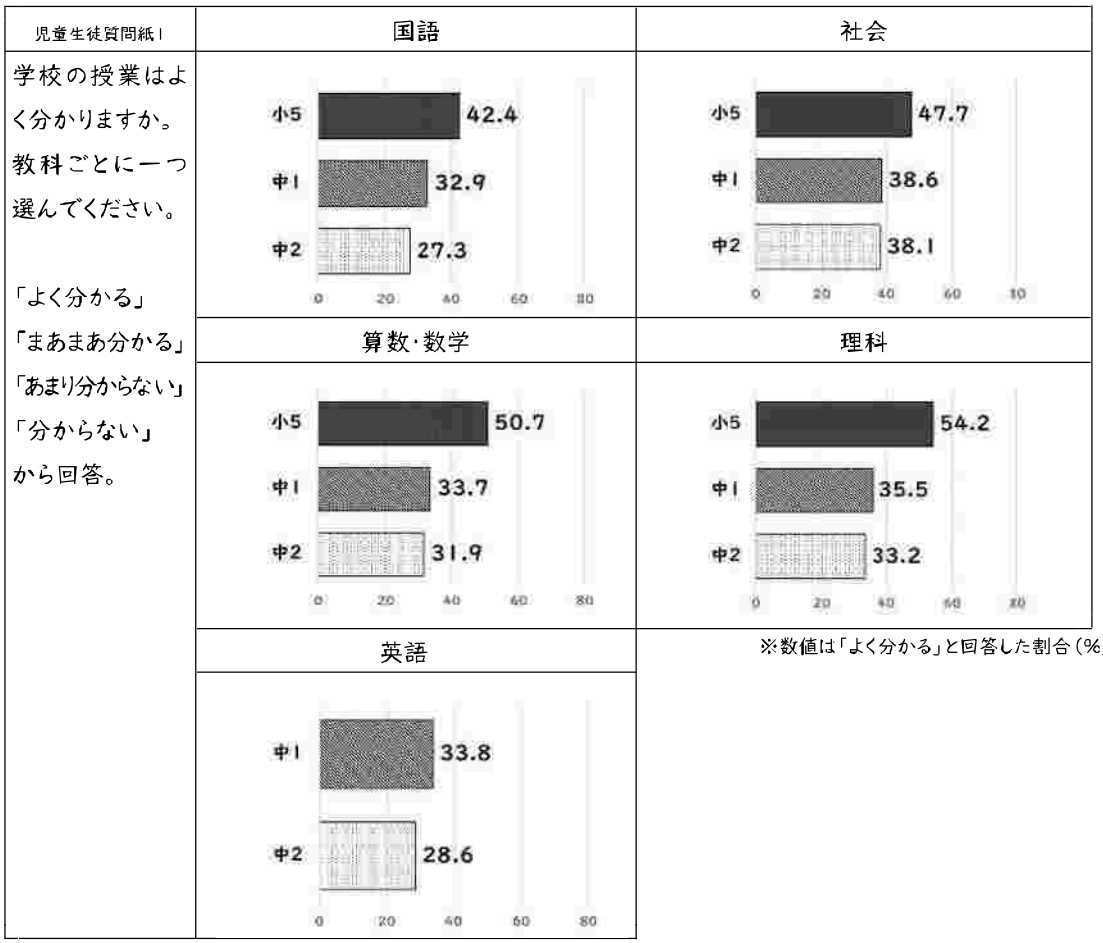
Ⅰ　子供たちは授業から取り残されていないか？

(1)　授業はよく分かる？

子供たちが学校で過ごす時間の大半は授業の時間です。この授業自体が「分からない」と，子供たちに必要な資質・能力が身に付かないのみならず，子供たちが学ぶこと自体が嫌いになったり，ともすれば登校する意欲を失ったりする可能性もあります。

そこで，今回の調査では，各教科ごとに，「授業はよく分かりますか。」と子供たちに聞いてみました。その結果，「よく分かる」と回答している子供は，小学校で4割～5割台，中学校になると，2割～3割台にとどまることが分かりました【図１】。この現状について，私たち教師は，どのように受け止めるべきでしょうか。また，全ての教科において，小5よりも中１，中１よりも中2と，学年が上がるごとに，「よく分かる」という回答をした子供は少なくなっています。このことは，年を重ねるごとに，子供たちが学びから「取り残されていく」「置き去りにされていく」ことを意味しているのではないでしょうか。

私たち教師は，子供たちに「学び」を提供するプロフェッショナルであるはずです。まずはこの結果を直視し，そして重く受け止め，一人一人が自分事として，これからの授業の在り方を見つめ直す必要があります。



【図１　授業についての理解状況】

(2)　なぜ子供たちは「授業がよく分からない」と言うのか？

では，なぜ子供たちは，「授業がよく分からない」のでしょうか。目の前にいる一人一人の子供たち全員が「よく分かる」と実感する授業を行うためにはどうしたらいいのでしょうか。

当然のことですが，子供たちが40人いれば，誰一人として同じ子供はいません。40人いれば40通りの理解状況や定着度の子供がおり，また，得意な理解の方法や学習方法等もそれぞれ異なります。では，私たち教師は，このことをどの程度授業において意識できているでしょうか。

教師が黒板に向かって「チョーク＆トーク」により授業を進める一律・一斉・一方向型の授業では，どうしてもその指導法に合う子供は一部になります。子供の理解状況等によっては，教師の教え方が難しかったり，あるいは，学習内容が簡単だったりする可能性があります。また，他の視点からの説明や別の資料の提供等があれば，理解が進む子供もいるかもしれません。

ではどうすればよいのでしょうか。私たち教師自身が，「メタ認知」[*1]，つまり，子供たちがどのような認知の状況にあり，また，どのような認知活動が得意なのか等，子供たちの認知の状況をよく把握し，授業の在り方を検討していく必要があります。すなわちこれは，「子供の学びの姿」に着目していこうということであり，教師が「何を教えたか」ではなく，子供たちが「何ができるようになったか」という，学習指導要領が求める資質・能力ベースでの授業改善を追究してくことにほかなりません。

大変難しい試みであるとは思います。しかし，「学び」を提供するプロフェッショナルとして，一律・一斉・一方向型の授業からの脱却に挑戦し，理想の「学び」の在り方を一緒に追究していきましょう。

2　これからの授業はどうあるべきか？

(1)　授業が変わりつつある！

【表1】は，本調査における授業に関する学校質問紙の調査結果と，令和4年4月に実施された全国学力・学習状況調査の調査結果との比較です。また，【表2】は同様の質問を，それぞれ児童生徒にも聞いたものです。

その結果，約1年前の調査と比較し，主体的な学びや協働的な学び，個別最適な学びに関する取組などが着実に進んできていることが分かります。また，今回の調査の結果では，子供たち自身も，主体的・対話的で深い学びの授業を実感しているような状況も見られつつあります。

例えば，全国学力・学習状況調査の結果と比べ，「話し合う活動を通じて，自分の考えを深めたり，広げたりすることができたか。」という設問において，小5では11.8ポイント，中1では13.7ポイント，中2では12.2ポイント増えていることが分かります。

---

*1　三宮（2022）による。「メタ認知」については自身の認知の状況を把握するという捉えだけでなく，他者の認知の状況を把握することも含まれる概念であると提唱している。例えば，「なぜよく間違えるのかを子供に気付かせるような指導を教師が行う際，子供が早合点してしまう癖があるといった認知特性についての知識を基に，判断し対応することができる」ことを例に挙げるなど，教師に特に求められる資質であると指摘している。

【表1　授業に関する学校への調査結果（全学調の県平均通過率との比較）】

学校質問項目	R5.1月 鹿学調 小学校(A)	R4.4月 全学調 小学校(B)	差(A-B)	R5.1月 鹿学調 中学校(C)	R4.4月 全学調 中学校(D)	差(C-D)
解決に向けて，自分で考え，自分からできていると思うか。【主体的な学び】	36.4	26.4	10.0	21.6	17.7	3.9
話し合いなどの活動で，自分の考えを深めたり，広げたりすることができていると思うか。【協働的な学び】	37.3	18.4	18.9	30.0	14.4	15.6
習得・活用及び探究の学習過程を見通した指導方法の改善及び工夫を行ったか。【指導方法改善】	47.6	34.6	13.0	30.0	23.9	6.1

※数値は「よく行った」「どちらかといえば行った」 あまりよく行わなかった」「行わなかった」という選択肢に「よく行った」と回答した割合（%）

【表2　授業に関する児童生徒への調査結果（全学調の県平均通過率との比較）】

児童生徒質問項目	R5.1月 鹿学調 小5(A)	R4.4月 全学調 小6(B)	差(A-B)	R5.1月 鹿学調 中1(C)	差(C-E)	R5.1月 鹿学調 中2(D)	差(D-E)	R4.4月 全学調 中3(E)
課題の解決に向けて，自分で考え，自分から取り組んでいたか。【主体的な学び】	29.1	27.8	1.3	22.7	-4.7	20.5	-6.9	27.4
話し合う活動を通じて，自分の考えを深めたり，広げたりすることができたか。【協働的な学び】	47.6	35.8	11.8	45.7	13.7	44.2	12.2	32.0
自分にあった教え方，教材，学習時間などになっていたか。【個別最適な学び】	40.4	38.0	2.4	24.6	5.8	19.1	0.3	18.8

※数値は「よく行った」「どちらかといえば行った」「あまりよく行わなかった」「行わなかった」という選択肢に「よく行った」と回答した割合（%）

これは，各学校で授業改善への取組や研究等が行われた結果，子供たち自身も「授業が変わった！」と実感できるほど，授業が変わってきつつあるということではないでしょうか。このことは，日頃の学校関係者及び行政関係者等の努力の成果であると考えます。

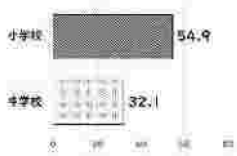
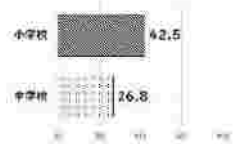
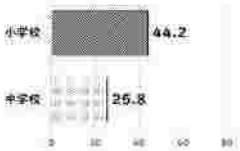
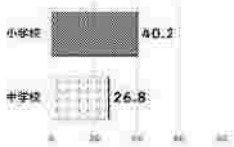
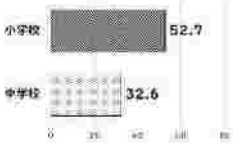
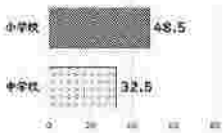
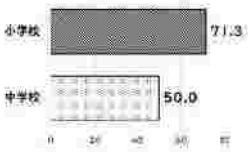
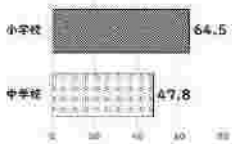
ただ，やはり依然として，数値そのものが低かったり，教師と子供たちの実感に差が見られたりする部分もありますので，その点については，しっかりと子供の学びへの実感へと還元されるよう，引き続き，授業改善等に努めていただければ幸いです。

(2)　指導方法の状況から見えてくる課題とは？

【図2】は，小学校段階と中学校段階の授業における指導方法の状況についての調査結果です。この結果を見ると，中学校段階においては，小学校段階と比較すると，その取組状況に大きな差が見られ，その結果は，各種学力調査の結果等にも表れています。この状況は，本県において継続して見られるものであり，私たち本県教育関係者は本気で原因を究明し，具体的な行動へとつなげていく必要があります。

本調査の質問紙の結果等を通して，「自分で考え自分からは取り組んでいない」，「授業はよく分からない」という子供たちの姿が見えてきます。教師から見た「自分で考え自分から学んでいる」子供とは，一体どんな姿なのでしょうか。下を向いて，一律・一斉・一方向的な教師の指示に従って，ただ黙々と板書を写す姿が，「自分で考え自分から取り組んでいる」姿ではないことは明らかです。

子供たちのため，確かな学力を身に付けさせるためにはどうすればよいか，学校全体でしっかり議論し，また，行政関係者は，学校や子供たちのためにどんな支援が必要かを考えていくことが大事ではないでしょうか。子供たちの一年は，二度とかえってこない貴重な一年であることを，私たち教師は改めて肝に銘じ，取組を確実に進めていく必要があります。

学校質問紙5	鹿学調	全学調
授業において，児童生徒の様々な考えを引き出したり，思考を深めたりするような発問や指導をしましたか。		
学校質問紙6		
授業において，児童生徒自ら学級やグループで課題を設定し，その解決に向けて話し合い，まとめ，表現するなどの学習活動を取り入れましたか。		
学校質問紙7		
児童生徒のよい点や改善点等を積極的に評価し，学習したことの意義や価値を実感できるようにしましたか。		
学校質問紙9		
児童生徒に対して，一人一人に配備されたPC・タブレットなどのICT機器を，授業でどの程度活用しましたか。		

※質問5～7の数値は「よく行った」「どちらかといえば行った」「あまりよく行わなかった」「行わなかった」という選択肢に「よく行った」と回答した割合（%）
質問9の数値は「よく活用している」「どちらかといえば活用している」「あまり活用していない」「全く活用していない」という選択肢に「よく行った」と回答した割合（%）

【図2　授業における指導方法】

(3)　「よくわかる授業」とはどのような授業なのか？

ア　授業づくりの出発点は？

「よく分かる授業」とは，一体どのような授業なのでしょうか。「よく分かるようにするためには，教師が丁寧にじっくりと説明しなければならない！」。ともすれば，そのような考えをおもちになる方もいらっしゃるかもしれません。確かに，教師目線で考えるとそうかもしれません。しかし，一度学習者の視点で授業を見つめ直せば，「よく分かる授業」とは，子供たちそれぞれによって異なるものであることに気付くはずです。だからこそ，前述のとおり，一律・一斉・一方向型の授業から脱却する必要があります。

イ　個別最適な学びと協働的な学び

それでは，一律・一斉・一方向型の授業の“逆”の授業は何でしょうか。「一律」の対義語としては「多様」や「ばらばら」などが，そして「一斉」の対義語としては「別々」や「個々に」といったものが出てきます。また，「一方向型」の対義語としては「双方向」「相互的」などが出てきます。

これらを総括して考えると，一律・一斉・一方向型の授業の“逆”の授業とは，「個別最適な学び」と「協働的な学び」が一体的に行われる授業なのではないかと考えられます。

「個別最適な学び」については，子供の特性や学習進度，学習到達度等に応じ，指導方法，教材や学習時間等を柔軟に設定するなどの「指導の個別化」と，教師が一人一人の子供に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供する「学習の個性化」を，学習者である子供の視点から整理したものです。

また，「個別最適な学び」が孤立した学びとならないよう，子供同士で，あるいは地域の方々をはじめ多様な他者とともに「協働的な学び」を行うことも求められます。

こうした「個別最適な学び」と「協働的な学び」の前提となるのは，「学習者主体の授業」にほかなりません。

ウ　「学習者主体の学び」へ！

「個別最適な学び」を行うに当たっては，学習者である子供一人一人が自らの学びについて課題意識をもち，自らの方法で自らの学びを調整し，また，自らの学びを振り返りながら次への課題に取り組む，といった学びが展開されることが重要です。

また，「協働的な学び」を行うに当たっては，子供たちが互いの視点をもちより，課題解決に向けてよりよい解決策を探っていく学びが展開されることが求められます。

これらに共通して求められる子供の姿は，「主体的」であることです。すなわち，「個別最適な学び」と「協働的な学び」の前提には，「学習者主体の学び」が必要となると言えます。

前述のとおり，本調査結果からは，こうした新しい学びの芽が，この1年間で県内の至るところで出てきていることが分かります。これは，調査対象学年や教科に限らず，全国学力・学習状況調査の結果を基に学校全体で共通実践や相互参観に取り組んだり，校内研修，短期研修講座，学力向上フォーラムや公開研究会などで学んだことを日々の授業に生かしたりと，これからの授業の在り方について真剣に考え悩みながら取り組んできた結果だと思います。

学校教育は大きな転換期に来ています。指導の成果を子供の姿で語れるよう，「子供は本来有能な学び手」であることに立ち返り，「学習者主体の授業」を一層展開していくことが必要です。この時代に子供たちの学びに関わることができることに喜びを感じながら，一緒に，「学習者主体の授業」へと歩みを進めていきましょう。

3　学習者主体の学びを支える「学びに向かう力，人間性等」

(1)　非認知能力に関する調査結果から

こうした学習者主体の学びを支える上で特に重要なのは，「学びに向かう力，人間性等」です。「学びに向かう力，人間性等」は，自己肯定感，粘り強さ，挑戦心，メタ認知などが幅広く含まれるものであり，一般的に非認知能力と認識され，学びの土台となるものです。そこで，今回の本調査では，全国学力・学習状況調査で取り扱った質問項目と同じ項目について取り扱い，比較を行うこととしました。

全国学力・学習状況調査の結果（令和4年4月）と比較してみたところ，調査対象学年は異なりますが，本調査の結果（令和5年1月）では，ほとんどの項目で全国学力・学習状況調査の数値を上回りました【表3】。

特に，「粘り強さ」や「挑戦心」については，本調査を受けた小5の子供たちは，約1年前に全国学力・学習状況調査を受けた小6よりそれぞれ7．5ポイント，9．5ポイントと大きく上回っています。また，本調査を受けた中1は，約1年前に全国学力・学習状況調査を受けた中3よりそれぞれ4．3ポイント6．9ポイント，同様に，中2は，中3よりそれぞれ4．8ポイント，5．3ポイントと，上回る結果となりました。すなわち，調査対象学年は異なるものの，約1年前と比較し，「粘り強さ」や「挑戦心」等の非認知能力に関する質問に対し肯定的に回答した子供たちの割合が増えています。

(2)　考察

これは，約1年前の全国学力・学習状況調査の結果を踏まえ，各学校において，非認知能力の重要性を意識した上で，様々な取組を行ってきた成果の表れであると考えます。現に，義務教育課が学校訪問等を行った際にも，自己肯定感の育成を中核に据えた学校経営を行ったり，非認知能力の育成を目指した校内研修を行ったりするなどの取組が見られました。

こうした取組により，一人一人が学ぶことの意義を実感し，また，そのよさや資質・能力を伸ばせるよう，各教師による子供への声かけが変わってきたことも要因の一つとして考えられます。このほか，各学校関係者が，非認知能力を念頭に，鹿児島の地域の力をフル活用しながら外部との連携を図ることによって，保護者や地域の方々の行動変容にもつながり，こうした多様な方々が子供たちに関わったことも，要因の一つとして考えられます。

このように，学校・家庭・地域が連携し，今，子供たちにどのような資質・能力が必要かを考え，ビジョンを共有しながら，一人一人の良さを伸ばせるよう取り組んできたことが，学力の土台となる「学びに向かう力，人間性等」を育むことにつながってきているのではないでしょうか。

【表3　「学びに向かう力，人間性等」に関する児童生徒への調査結果】

令和4年度鹿児島学習定着度調査 質問項目	R5.1月 鹿学調 小5(A)	R4.4月 全学調 小6(B)	差(A-B)	R5.1月 鹿学調 中1(C)	差(C-E)	R5.1月 鹿学調 中2(D)	差(D-E)	R4.4月 全学調 中3(E)
自分によいところがあるか。【自己肯定感】	36.0	32.4	3.6	29.4	0.3	28.2	-0.9	29.1
先生は，あなたのよいところを認めてくれていると思うか。【自己肯定感】	44.6	38.8	5.8	35.3	3.2	34.1	2.0	32.1
自分でやると決めたことは，やり遂げるようにしているか。【粘り強さ】	46.0	38.5	7.5	41.7	4.3	42.2	4.8	37.4
難しいことでも，失敗を恐れないで挑戦しているか。【挑戦心】	35.2	25.7	9.5	26.1	6.9	24.5	5.3	19.2
自分で計画を立てて勉強しているか。 【学びに向かう力】	30.1	24.1	6.0	19.5	5.1	15.1	0.7	14.4
学習した内容について，分かった点や，よく分からなかった点を見直し，次の学習につなげているか。【メタ認知】	36.3	33.3	3.0	28.5	4.3	25.4	1.2	24.2

※数値は「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」「どちらかといえば当てはまらない」「当てはまらない」という選択肢に「当てはまる」と回答した割合(%)

(3)　今後の展望

学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力，人間性等」は，子供たちが「どのように社会や世界と関わり，よりよい人生を送るか」に関わる資質・能力であり，生きて働く「知識・技能」，未知の状況にも対応できる「思考力，判断力，表現力等」という2つの柱を，どのような方向性で働かせていくかを決定付ける重要な要素です。

また，「学びに向かう力，人間性等」は，多様性を尊重する態度や協働する力，感性，やさしさや思いやりなども幅広く含み，「テストの点数等で測ることが可能な認知能力は時間が経つとなくなるものもあるが，非認知能力は一度身に付けると一生持続する。」[*2]ともいわれています。

このように重要な要素である非認知能力に関し，子供たちが自信をもって肯定的に自己評価をしている姿を想像すると，大変頼もしく感じます。各学校等において行われつつある非認知能力の育成を図るための各種取組を更に充実させることで，子供たちがこれからの時代の変化を前向きに受け止め，社会や自分の人生をより豊かなものにしていくことができるよう，「学びに向かう力，人間性等」を育んでいきましょう。

4　教師としての矜持を胸に

私たち教師は，今も昔も子供のことを中心に考え，教育という壮大な営みに携わり続けてきています。すべての子供たちが困難を乗り越え，幸せに生きていく力を身に付けてほしいという教師の願いは変わりません。そのような中，習熟の差を埋められない，子供の多様なニーズに応えられないなど，従来の指導を繰り返すだけではうまくいかないことが多くなっていると感じているのではないでしょうか。

子供たちの未来は，今，まさに創られているところです。だからこそ，今，「学びの変革」へ挑戦する必要があります。変えるのは授業や子供に対する「考え方」です。変えていくことには不安や戸惑いも伴います。しかし変えていかなければなりません。

一緒に変えていきましょう。それが私たち教師の責任です。

*2　中室(2015)による。著書「『学力』の経済学」ディスカバー・トゥエンティワン。